

特集：スクミリンゴガイ研究の進展状況と防除技術の展望

福岡県におけるスクミリンゴガイの発生の経緯と現状

福岡県農林業総合試験場 清 水 信 孝

はじめに

通称「ジャンボタニシ」などと呼ばれるスクミリンゴガイの野生化が福岡県で初めて確認されてから30年が経過する。現在では県内各地でその存在が普通に認められるようになり、多くの水稲生産者にとって本種は何らかの対策を講じなければ稲苗に甚大な被害を及ぼす厄介な存在となっている。また、河川や水路の壁面に産み付けられたピンク色の卵塊は地域の景観を大きく損ね、水稲生産者のみならず農業に従事していない一般県民にもその存在が知られるまでになっている。

本稿では、福岡県におけるスクミリンゴガイの発生経緯を試験場や病害虫防除所の資料に基づいてとりまとめ、現在、現地で実際に行われている本種の被害防止対策など対応策と併せて紹介する。

I 福岡県における発生経緯

1 スクミリンゴガイの導入と野生化

福岡県では1981年ころからスクミリンゴガイが食用を目的として養殖業者の手によって導入され、養殖が始まったようである。本種が飼育しやすいことも手伝って養殖業者数は増加し、最盛時の1983年には25市町村の39業者（自家食用も含む）が確認されている。しかし、食味が消費者の嗜好に合わなかったことから販売価格は低迷し、また各地で本種の野生化が問題となり始めたことから廃業する業者が相次ぎ、1986年までにはすべての業者が廃業した。

養殖は水田転用地内の水槽や既存の養魚池等を利用して行われていた。また、養殖業者は漁業関係者ではなく他産業からの転業者や副業的な業者であったため、飼育管理に対する水産サイドからの指導が難しい状況にあった。このような状況の中、1983年に北九州市の水路と嘉穂郡嘉穂町（現、嘉麻市）の蓮池でスクミリンゴガイの卵塊が初めて確認され、翌年の1984年には久留米市の水田内でも本種の発生が認められた。1985年には7

市8haの水田で移植後間もない水稲が食害され、一部では生貝密度が1m²当たり50個、被害株率90%を超える水田も見られ、補植や植え替えが行われた。本種が野生化した原因として、養殖時における管理不良、廃業に伴う生貝および卵塊の放置や処分不徹底等によって容易に水路などへ散逸したものと推察された。1987年6月30日時点で、福岡県下の97市町村（当時）のうち55%に当たる53市町村でスクミリンゴガイの野生化が認められた（図-1）。このうち少なくとも41市町村で過去に本種の養殖場が存在しており、この事実もこれら養殖場からの散逸を裏付けている。

2 福岡県内の水稲における分布の推移

福岡県の水稲におけるスクミリンゴガイ発生面積の推移を図-2に示した。1984年に久留米市の水田2haで初めて確認されたスクミリンゴガイは、翌年の1985年には17市町村（当時）、408haの水田で確認された。その2年後の1987年には発生面積が1,000haを超え、さらに2年後の1989年には5,000haを超えるまでに急速に分布を拡大した。県内各地で養殖場から散逸したスクミリンゴガイが水路をつたって拡散、定着し、これらの一部が隣接する水田内に取水時や多雨による浸冠水によって侵入したものと考えられた。そして、初確認から10年後の1993年には福岡県における水稲作付面積の約30%に該当する16,000haで本種の発生が認められるようになった。

スクミリンゴガイの発生面積は1993年以降も年による増減を繰り返しながら現在まで増加しているが、その程度は緩やかなものとなっている。2013年における発生面積は本県の水稲作付面積の約50%に該当する約20,000haであり、現在では県内全域の平坦部を中心とした水田の多くで本種の発生が認められる状況となっている。

II 現在の対応

1 被害防止対策

初発生から30年が経過した今では、福岡県内の多くの水田でスクミリンゴガイに対する防除対策が必要な状況となっている。現在、福岡県の水田で実際に行われているスクミリンゴガイの被害防止対策については、主に

History and Current Status of the Occurrence of the Apple Snail, *Pomacea canaliculata* (LAMARCK), in Fukuoka Prefecture. By Nobutaka SHIMIZU

（キーワード：スクミリンゴガイ、水稲、被害防止）